

「対話でこそ、信頼をつくれる」

・・・対話の大切さ、有効性について対話しました。

2017/7/23 くらしと政治を語りあう会、開催

CANは7月23日(日)、消費者革新懇と「くらしと政治を語りあう会」を民主会館(名古屋市新栄)にて開催しました。



この会のきっかけは、暉峻淑子(てるおか いつこ)さんの本、「対話する社会へ」(2017年)でした。北朝鮮との軍事的緊張をあおり、軍拡を進めるトランプ米政権と安倍政権への危機感もありました。そして日常生活においても競争と格差、対立が目につくようになっていきます。人間本来の「対話力」こそが今大切、そんな思いからの開催呼びかけでした。当日の対話の一部を紹介します。

ディベートでなく対話を

私たちの世代は、ディベートが得意だ。論争して相手を論破する。しかしこれでは連帯は生まれない。今必要なのは、対話することだ。相手の意見も聞き、共通の認識を確認し積み上げながら力をあわせていくことだ。一方的に自説を主張するだけでは「連帯」今の社会を変える力は作れない。

名古屋も戦場だった

この季節になると名古屋市内の戦跡巡りをしている。動ける間は呼びかけて皆さんと歩く。100メートル道路(若宮大通)を掘ると人骨が出てくる。空襲による被害者だ。名古屋が空襲され、多くの方が亡くなったこ

とを忘れてはならない。戦争の惨さをきちっと伝えることを続けたい。

リニア問題をきっかけに

瀬戸市に住んでいる。窯業が盛んで陶土を採掘したグランドキャニオンのような地域がある。ここにリニア中央のトンネル工事で出た残土を持ち込む作業が始まろうとしている。静かだった住宅街を大型トラックが往来することになる。静かな生活環境は一変する。この件について団地の一軒一軒を訪ねて対話を始めた。お宅によっては半日話し込むこともある。これまで選挙の時など訪ねてもケンモホロロだった。皆さん対話を求めているんだと痛感した。

繋がりをどう作っていくか

地域の高齢者向けのイベントにできるだけ参加している。自身のボケ防止「脳トレ」にもなる。めざすはピンピンコロリ。人と人との繋がりをどう作っていくか、対話の持つ意味は深い。

生協の組合員活動・市民運動は「コスト」?

先日、生協の幹部と話していて唖然とした。組合員活動は「コスト」だという。生協は地域の様々な市民活動を支えているが、これを数字で表すことはできないはずだ。コストだと言い出したとたん、「成果」がすぐになくムダ銭扱いされてしまう。地域の人々の営みと共に歩む生協運動の原点は忘れてはいけない。

(CAN レポーター 大村昌宏)